

# 母親の育児観・発達初期における母子相互交渉・ 児の気質的特徴が愛着形成・行動発達に及ぼす影響

三宅和夫(北海道大学教育学部)

われわれは、妊娠32週より児の生後2年間にわたって母子相互交渉・児の気質的特徴・さらに母の養育態度や育児観について縦断的に多面的資料を収集してきた。その主なる目的は最初期からの児の気質的特徴と母側の諸要因が、母子の相互交渉を通じてどのように交絡して、児の母への愛着形成を中心とした社会的・情緒的発達にかかわっていくのかを明らかにすることであった。このような目的のもとに収集された資料の分析を通じて明らかにされた主なることはおよそ次の通りである。

1) 児の生後1年における母への愛着の型について Ainsworth Strange Situation Procedure によって検討したところ、29例中10例がC型(母がいっしょであっても慣れず、母がいなくなると情緒的に混乱し、戻ってくるとだっこをねだったりするが、気嫌がなおらない、Anxious/resistant とよばれる型)、のこりの19例がB型(母といっしょにいと積極的に行動し、母と再会するとよろこんで、だっこを求めたりし、また積極的に行動するという、securely attached とよばれる型)で、A型(母といっしょでも母と無関係に勝手に行動し、母との分離にもあまり抵抗せず、母が戻っても無視したりする Anxious/avoidant とよばれる型)は皆無であった。これをアメリカの諸研究の結果と比較すると、B型の比率はほとんど同じであるが、C型が日本において非常に高い比率で存在(アメリカで5%以下なのに対し22.6%)すること、A型がアメリカで30%近くあるのが日本で皆無なことである。このような文化差の背景としては、(i)児の気質的特徴という生物学的要因における日米の人種差、(ii)母の児へのかかわり方の違いによって児の経験が異なることなどがあると考えられる。そこでわれわれが新生児期より収集した資料についてこのことを検討した。

2) まず児の気質的特徴とかかわるいくつかの測定について検討したところ生後約2年間にわたっ

て一貫性が見られた。すなわち、(i)新生児期における nipple の sucking を中断させたとき、C型の児はB型よりも crying する率が高く、1、3カ月時の観察からもC型の方に crying や irritable な行動が多かった。(ii)7カ月時に知らない人が接近したり、母が傍らをはなれたときの反応について見ると、C型の方に恐れを示す行動が多く、心拍数の増加度にも反映していた。(iii)11カ月時におけるあそびの観察によれば、C型の方があそびの中断回数が多く、従って1回あたり持続時間も短かった(B5分、C1分)。これは、慣れぬ場面でC型が恐れや不安を多く示したことと関係があると考えられる。(iv)23カ月時の知らない人への反応、ロボットへの反応をみると、C型の方が不安・恐れを示す行動の率が高かった。以上のことから児の irritability, fear という気質的側面は最初期から約2年間にわたってかなり一貫したものであることが分かる。日本にC型が多いということとこのような結果とをあわせ考えると、アメリカと比べて日本の児には、上記のような気質的特徴を持つ者が多いと言えよう。

3) 2)のこととかかわって母の児に対するかかわり方を、7カ月の自由あそび場面においてみると、C型の母親の方が児のあそびを中断させることが多いが、これは児が恐れや不安からよくあそばないことによると思われる。またB型、C型の児を恐れの高さの度合、母によるあそびの中断の頻度の多少でそれを2分してみると、B型と母の中断の度合との関係はあまりない。すなわち母の中断が多くても少なくとも恐れ・不安の度合の低い者が多い。このことから、恐れ・不安という気質的特徴の目立たぬ児は母のかかわり方にあまり影響されずにB型(安定愛着)になると推測され、母の児に対するかかわり方が直接に12カ月時の児の愛着の型に結びつくのではなく、気質が大きい役割を果たしていると思定される。もちろん母のかかわり方の影響が全くないわけではない。特に恐れ・不安の高い児の場合にはかかわり方が悪い

とC型になることが多く、このことは扱いにくい児、さらに high-risk 児の場合の母の育児の仕方の重要性を示唆する。

ただ、C型が幼児期において発達上の問題を多く示すかどうか（アメリカではAとともにCが後に発達上の問題を示すことが多い）については今後の検討が必要である。日本の文化においては必

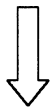
ずしもそうならないということも十分に推測できる。

以上の他われわれは出産までの母の育児観などと、児の行動との関係その他についての資料も収集し分析を行った。今後幼児期までにわたっての follow-up を行うとともに、乳児期について今日の経験を踏まえ、さらに適切な資料収集を実施することを計画している。



## 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



われわれは、妊娠 32 週より児の生後 2 年間にわたって母子相互交渉・児の気質的特徴・さらに母の養育態度や育児観について縦断的に多面的資料を収集してきた。その主なる目的は最初期からの児の気質的特徴と母側の諸要因が、母子の相互交渉を通じてどのように交絡して、児の母への愛着形成を中心とした社会的・情緒的発達にかかわっていくのかを明らかにすることであった。このような目的のもとに収集された資料の分析を通じて明らかにされた主なることはおよそ次の通りである。